

1) 学生定期健康診断における 検尿の問題点（抄録）

金沢大学保健管理センター

東福 要平 木場 深志

赤池 幸子、中越 伸子

金沢大学 第二内科

紺井 一郎、竹田 亮祐

金沢大学において毎年1回施行している学生の定期健康診断検査のうち、尿検査所見の成績から、一定の集団を対象とした集団検尿についての問題点を検討した。対象は昭和62年度に本学に在学中の学生7,113名(男5,443、女1,670名)である。検尿は随時尿について行い、試験紙法で蛋白、潜血反応(±)以上を陽性と診断し、更に第二次、第三次検尿、必要な例では腎生検を施行した。

成績：昭和62年度を受診率は77.2%で、例年とほぼ同様であった。本学入学時に既に腎疾患を指摘されている者は13名で、これらを含めて初年度の尿蛋白、潜血反応陽性者は89名(1.3%)であったが、次年度以降の成績をみると、初年度陰性群の中からもかなりの数の陽性者が出現し、学年を経るにしたがい陽性者が増加した。腎生検施行例ではIgA腎症が最も多数を占めた。

糸球体腎炎の好発年齢に属する大学生においては、前年度の成績にかかわらず毎年1回の検尿が不可欠である。

(第18回日本腎臓学会西部部会(1988.5.19-20、金沢市)にて口演)